



Title	デンマーク語の述部不定詞句の論理的主語
Author(s)	間瀬, 英夫
Citation	IDUN. 1996, 12, p. 83-104
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95736
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デンマーク語の 述部不定詞句の論理的主語

間瀬英夫

1. 序

Erik Hansen (1968: 51) に、「次の文の〔不定詞句の〕論理的主語および論理的
目的語を説明せよ」という練習問題がある（番号等は本稿筆者による；以下では、こ
れらの (H1)–(H8) の文を「標記の文」と呼ぶ）。

(H1) Jeg lovede ham at blive.

(H2) Jeg lovede ham at måtte blive.

(H3) Vi tilbød dem at tage penge med.

(H4) Vi tilbød dem at få penge med.

(H5) Man lader lærerne undervise igen.

(H6) Man lader eleverne undervise igen.

(H7) Han bad mig om at blive klippet.

(H8) Han bad mig om at få lov til at blive klippet.

これらの文の（述語動詞を除いた）述部は名詞句と不定詞句から成るが、述語動詞
の意味的特徴と不定詞または不定詞句全体の意味的特徴の組み合わせによって、文意
が2通り（以上）に解釈されることがある。これは、とくに love, tilbyde, bede
om を述語動詞とする文に当てはまる。これらの動詞のふるまいは、どちらかと言え
ば特殊なもので、実際、E. Hansen (1968: 28ff.) は、次章 § 2 で示す一般的な型の
「埋め込み文」だけを取り上げており、上記の練習問題においてのみこの特殊な動詞
を含む文を挙げているのである。一方、lade を含む文の多義性は、これらとは別の
統語的理由による。§ 2 では、一般的な型の「埋め込み文」を例示し、その後 § 3 で
標記の文の意味を見ていくことにする。

2. 2項他動詞の一般的性質

2項他動詞（ditransitive verb）とは、述部に2個の文法項を要求する動詞であ
る。この述部の2項のうちの第1項は名詞句、第2項には様々な句が現れうる。両者
の文法的関係は、第1項の名詞句が論理的主部、第2項がその述部となることが多い
（„meget ofte“ (Mikkelsen 1911: 407); „nogenlunde konstant“ (Rehling 1965:
132); E. Hansen 1968: 28ff. も参照）。それゆえ、この関係を形成する2項の内的
構造は「隠れた文」（„skjult sætning“ (Rehling 1965: 132)）あるいは「埋め込み
文」（„indbygget sætning“ (E. Hansen 1968: 28)）などと呼ばれる。この構造につい

ては同様に、Mikkelsen (1911) も例文を豊富に示し論述しており、Rehling (1965: 131ff.), Diderichsen (1962: 170, 188, 217), E. Hansen (1968: 28ff.) にも見られる。このような述部の2項の関係は、この述部を支配する一般的な型の2項他動詞のもつ「語彙的」特徴と言えよう。述部の2項は次の構成要素から成る: 1. 名詞句 + 原形不定詞 (= at なしの不定詞); 2. 名詞句 + at 不定詞; 3. 名詞句 + 前置詞 + at 不定詞; 4. 名詞句 + 名詞句; 5. 名詞句 + 前置詞句; 6. 名詞句 + 形容詞句; 7. 名詞句 + 副詞句。

例を見てみる。([] 内は、埋め込み文を独立文にした場合の仮の文。参考文献からの直接の引用文の場合、著者名(省略形)および頁を示す。著者名は次のように省略する: AaH=Hansen, Aage (1967); B=Bruun (1995); D=Diderichsen (1962); EH=Hansen, Erik (1968); LD=Hildeman/Hedbäck (1993); M=Mikkelsen (1911); N=Becker-Christensen/Widell (1995); R=Rehling (1965); Ax=Axelsen (1995)。参考文献からの引用の場合、原文の名詞が大文字で始まるものがあるが、本稿では全て小文字始まりに直した。出典明記のない場合は、辞書類に見られる当該語句を基にして作った文。)

- (1) Jeg så flyvemaskinen falde ned. (B: 377)
〈私はその飛行機が墜落するのを見た。〉
[Flyvemaskinen faldt ned.]
- (2) Han bød dem komme nærmere. (N: 225)
〈彼は彼等にもっと近くに来るようにと言った。〉
[De kommer/kom nærmere.]
- (3) Han anbefalede mig at tale med chefen selv. (N: 121)
〈彼は私がボス本人と話し合うように勧めた。〉
[Jeg taler/talte med chefen selv.]
- (4) Hans fader har forbudt ham at ryge. (Ax: 222)
〈彼の父親は彼に煙草を吸うことを禁じた。〉
[Han må ikke ryge.]
- (5) Jeg fik ham til at gøre det.
〈私は彼にそれをやらせた。〉
[Han gjorde det.]
- (6) Jeg har advaret ham mod at misbruge medicin.
〈私は彼に薬を乱用しないようにと警告した。〉
[Han må ikke misbruge medicin.]
- (7) Han nægtede os adgang.

- 〈彼は私達の入場・使用を拒否した。〉
[Vi får/fik ikke adgang.]
- (8) Han gav mig 100 kr.
〈彼は私に100クローネくれた。〉
[Jeg fik 100 kr.]
- (9) Han viste mig et billede.
〈彼は私に絵を1枚見せてくれた。〉
[Jeg så et billede.]
- (10) Man fratog ham kørekortet. (EH: 30)
〈[当局は] 彼から運転免許証を没収した。〉
[Han mistede kørekortet.]
- (11) De har kaldt drengen Peter. (N: 568)
〈彼等はその男の子をPと名づけた。〉
[Drengen hedder Peter.]
- (12) Han afviste mig fra deltagelse i mødet.
〈彼は私が集会に参加することを拒否した。〉
[Jeg kan/kunne ikke deltage i mødet.]
- (13) Jeg fortalte ham om fodboldkampen.
〈私は彼にサッカーの試合のことを話した。〉
[Han hørte om fodboldkampen.]
- (14) Vi valgte ham til formand.
〈私達は彼を委員長に選んだ。〉
[Han blev formand.]
- (15) Vi har malet vinduerne hvide.
〈私達は窓を白く塗った。〉
[Vinduerne er (blevet) hvide.]
- (16) Mine ord gjorde ham vred.
〈私の言葉は彼を怒らせた。〉
[Han blev vred.]
- (17) De har Jensen boende. (EH: 28)
〈彼等はJを同居させている。〉
[Jensen bor hos dem.]
- (18) Vi holdt ham hjemme.
〈私達は彼を家に留めおいた。〉
[Han blev hjemme.]

(19) Hun sendte børnene af sted for at hente lægen. (D: 217f.)

〈彼女は子供達を医者を呼びに送り出した.〉

[Børnene tog af sted for at ...]

(20) Hun viste mig ind i stuen.

〈彼女は私を居間に案内してくれた.〉

[Jeg kom ind i stuen.]

以上のように、述部の2項は論理的主部とその述部を構成する「埋め込み文」となるのが一般的である。なお、このほかの「埋め込み文」の例は「付記」として本稿末に示す。

3. 標記の文の意味

§ 1 に示した標記の文が多義性となるのは、lade とその他の3個の動詞 love, tilbyde, bede om とでは異なる文法的理由による。lade に支配される名詞句と原形不定詞の関係は常に「論理的主語とその述部」となる。一方、love, tilbyde, bede om に支配される述部第2項の不定詞の論理的主語には、述部第1項の統語的目的語のみではなく、統語的主語もなりうる。以下では、標記の文の番号順通りではないが、lade から見ていくことにする。(なお、これらの文意を確かめるために、筆者は同僚のデンマーク人客員教授3人(Knud Christensen, Henrik Galberg Jacobsen, Martin Paludan-Müller の諸氏)の協力を得た。)

3.1. lade

動詞 lade は、述部に“目的語+原形不定詞”をとる使役動詞で、〈人に…させる、させてやる、することを許す〉といった意味をもつ。このような述部を構成する動詞はこのほか、使役的 bede (cf. § 3.4), byde (cf. 例文 (2)) および感覚動詞 (se (cf. 例文 (1)), høre, føle など) である。目的語と原形不定詞の関係は常に「論理的主語とその述部」となる(つまり、「埋め込み文」を形成する)。Diderichsen (1962: 217) によると、この種の構文において、不定詞の論理的主語はそれが文脈からわかる場合や不定主語の場合には省略されることがある((21)–(24)は Diderichsen (*loc. cit.*) より。[] 内の語句は Diderichsen 自身が示す省略されうる部分)。

(21) Han lod [en arkitekt] opføre et pragtfuldt mausoleum.

〈彼は[ある建築家に] 壮大な霊廟を建造させた.〉

(22) Vi har hørt [nogen] sige, at Peter skal giftes.

〈Pが結婚すると[誰かが] 言っているのを聞いた.〉

このように、統語的目的語(=不定詞句の「論理的主語」)が省略されると、不定詞

の目的語が、統語的目的語の位置に移動することがよくある。(なお, jeg har hørt sige, at ... の表現はごくふつうに使われる.)

(23) Lejrchefen lod fangerne piske.

〈収容所長は捕虜をむちで打たせた.〉

(24) Jeg har hørt historien fortælle i et stort selskab.

〈その話が大きな集まりで語られるのを聞いた.〉

このような省略および不定詞の目的語の移行については, Mikkelsen (1911: 110), Aa. Hansen (1967: 81ff.) でも記述されている(後述 § 3.4 の bede も参照).

(25) Han lod bogen trykke. (AaH: 82)

(= Han lod bogen blive trykket.) (AaH: 83)

〈彼はその本を印刷させた.〉

以上のことから, 標記の (H5), (H6) は次のように解釈される.

(H5) Man lader lærerne undervise igen.

a. [lærerne = 統語的目的語 = 不定詞の論理的主語]:

(= Man lader lærerne undervise [nogle] igen.)

〈教師達が再び教えることを許す.〉

b. [lærerne = 不定詞の目的語; 統語的目的語の位置に移行]:

(= Man lader [nogen/nogle] undervise lærerne igen.)

〈教師達が再び教わることを許す.〉

(H6) Man lader eleverne undervise igen.

a. [eleverne = 統語的目的語 = 不定詞の論理的主語]:

(= Man lader eleverne undervise [nogle] igen.)

〈生徒達が再び教えることを許す.〉

b. [eleverne = 不定詞の目的語; 統語的目的語の位置に移行]:

(= Man lader [nogen/nogle] undervise eleverne igen.)

〈生徒達が再び教わることを許す.〉

社会常識から見て, (H5a), (H6b) はごく自然であろう. 同様に (H5b), (H6a) も, 教師が新たな知識を身につけるために再び勉強することや, 生徒がたとえば教育実習などで教える機会をもつという状況もありうるので, コンテキスト次第で同様に自然なことであろう.

3.2. love

動詞 love は述部第2項の at 不定詞の論理的主語が文の統語的主語である可能性が強い唯一の動詞である. 換言すると, 述部第1項の名詞句が不定詞の論理的主語となるためには, 不定詞句の意味的条件が整わなくてはならない.

Mikkelsen (1911: 406) によれば, love および tilbyde に支配される不定詞句の前に「間接目的語」 („hensynslet“) である名詞句があるとき, 不定詞の論理的主語は文の統語的主語または間接目的語のどちらにもなりうるとし, (26), (27) を挙げている.

(26) Jeg har lovet ham at komme (= at jeg skal komme). (M: 406)

〈私は行くと, 彼に約束した.〉

(27) Jeg har lovet ham at blive min efterfølger (= at han skal blive min efterfølger). (M: 406)

〈私は彼が私の後継者となることを彼に約束した.〉

つまり, 不定詞句の内容によって不定詞の論理的主語は決まる. たとえば, (27) の min を hans に変えれば (28) となる.

(28) Jeg har lovet ham at blive hans efterfølger.

(= Jeg har lovet ham at jeg skal blive hans efterfølger.)

〈私は, 私が彼の後継者となることを彼に約束した.〉

(なお, ham¹ と hans² が別の人である場合も考えられるが, このことは不定詞の論理的な主語とは関係しないので, 以下ではこれらについては省略する.)

このことから, 標記の (H1), (H2) は次のように解釈される.

(H1) Jeg lovede ham at blive.

(= Jeg lovede ham at jeg skulle blive.)

〈私は私が留まることを彼に約束した.〉

(H2) Jeg lovede ham at måtte blive.

(= Jeg lovede ham at han måtte blive.)

〈私は彼が留ってもよいと彼に約束した.〉

3.3. tilbyde

§ 3.2 の love の項で述べたように, Mikkelsen は, tilbyde に支配される不定詞句の前に間接目的語があるとき, 不定詞の論理的な主語には文の統語的主語または間接目的語がなりうるとし, 次の文を示している.

(29) Jeg tilbød ham at rejse i hans sted. (M: 406)

〈私は彼に代わって私が出かけようと彼に申し出た.〉

(30) Jeg tilbød ham at rejse i mit sted. (M: 406)

〈私は私に代わって彼が出かけるようにと彼に申し出た・勧めた.〉

つまり, 不定詞の論理的な主語は, 不定詞句の意味内容によって決まることになる. このことから,

(31) Jeg tilbød ham at rejse.

は, 文主語の「私」または間接目的語の「彼」のどちらかが「出かける・旅に出る」

ことになる。(ただし、このようなあいまいな文はもちろん用いない方がよい。) 次の場合も2通りに解釈される。

(32) Jeg tilbød ham at låne bogen.

a. <私は彼が(誰か/私から)その本を借りることを彼に勧めた.>

b. <私は私がその本を借り(て行き・来)ましようとして彼に申し出た.>

標記の (H3), (H4) は、不定詞 tage と få の意味の違いから、次のようになる。

(H3) Vi tilbød dem at tage penge med.

<私達は私達がお金を持って・取って行くと彼等に申し出た.>

(=Vi tilbød: „Vi tager penge med.“)

(H4) Vi tilbød dem at få penge med.

<私達は彼等がお金を受け取って・もらって行くようにと彼等に申し出た・勧めた.>

(=Vi tilbød: „I får penge med.“)

動詞 tage (noget med) は能動的な行為を示す動詞である。tilbyde はその主語が積極的に何かを申し出る・勧めることを意味する動詞である。この両者の動詞の意味から、訳文のような文意が導かれる。

(H4) の få は「得る」という基本的意味をもつが、「得る」とはどういう意味合いであろうか。たとえば

(33) Det er ikke let at få en lejlighed i København. (LD: 22)

<コペンハーゲンでマンションを手に入れるのは容易ではない.>

(34) Jeg har fået et brev fra ham.

<私は彼から手紙をもらった.>

(35) Jeg har fået ondt i maven.

<私は腹が痛くなった.>

のうち、(33) の få はとくに受動的な意味合いは伴わないと思われるが、(34)、(35) は、「誰か」あるいは「何か」が「授与者」で、文主語は「受容者」の意味合いとなる。つまり、これらの場合の få は受動的な意味合いを伴う。

(H4) の få はこの受動的意味合いを伴う。したがって、tilbyde の統語的主語は「提供者・授与者」であり、få の「受容者」となるということと相反することになるので、間接目的語の dem が不定詞 få の論理的主語(「受容者」)となる。

(36) Jeg tilbød ham at få en gave.

<私は彼がプレゼントを受け取るように彼に勧めた.>

でも同様である。

この解釈に関しては協力者3名の回答は一致しているが、Christensen は、統語的主語の jeg が få の論理的主語となることも“不可能ではない”(„ikke umuligt”)

との回答も示している（その場合には、授与者は別の第3者である）。事実、få と類似の意味合いの modtage では、

(37) Jeg tilbød ham at modtage en gave.

a. <私は彼がプレゼントを受け取るようにと彼に勧めた.>

b. <私は私がプレゼントを受け取ることを彼に申し出た.>

のように、統語的主語または間接目的語が modtage の論理的主語となりうる。これは上述の (29), (30) の rejse などと同様である。これらの事実から、不定詞 få の論理的主語が文の統語的主語である場合もありうると思われる（その場合の文意は <私は「誰も受け取らないので」私がプレゼントを受け取ることを彼に申し出た.>）。

3.4. bede

動詞 bede の基本的な意味は、2 項他動詞として <求める、要求する、依頼する；懇願する>、<招待する> および自動詞または 1 項他動詞として <祈る、祈願する> である。

bede に支配される述部第2項の不定詞は原形不定詞または om at 不定詞となる。これは文の構造上の相違であるが、意味の点では両者はほぼ同意であり、事実、下記の (38)–(40) のように用いられており、辞書類でも同様な記述しかない。しかし、筆者が Paludan-Müller 氏に確認したところによれば、意味的相違があるとすれば、原形不定詞を従える bede は命令の意味合いを多少含む「求める、要求する」の意であり、om at 不定詞を従える場合は「懇願する」のニュアンスをもつようである。もしこのような意味的相違があるとすれば、(38), (39) と (40) の用法はどちらかと言えば、逆である。

(38) Ville De bede hende ringe til fru Langgård? (LD: 35)

(39) Ville De være rar at bede Deres kone ringe før klokken seks,
hvis hun kan? (LD: 35)

(40) Læreren beder eleverne om at strege nogle ord under i teksten,
som de skal lære til næste gang. (LD: 39)

つまり、(38), (39) は丁寧な依頼の文内容であるのに対して、(40) は教師が生徒に要求をしている文内容であるので、±om at は逆であろう。それゆえ、もし ±om at が逆であるとすれば、(38)–(40) の文意は次のようになろう。

(38) <奥様にしまでお電話を下さるようお伝え下さいますか.>

(39) <奥様に、もしできましたら、6 時までにお電話を下さるようお願いいた
だけますでしょうか.>

(40) <先生は、テキストの中の次回までにおぼえてくるべきいくつかの単語に
アンダーラインを引くようにと生徒達に言った.>

しかし、同時に、これらの例文は *om at* による意味ニュアンスの違いが必ずしも安定していないことを示しているのかもしれない。なお、(40) の例文と同じ課に、それに先だって前頁に *om at* のつかない（原則にかなった？）文の (41) がある。

- (41) Senere beder læreren eleverne forklare nogle ord i teksten. (LD: 38)
〈その後、先生はテキストの中のいくつかの単語を説明するようにと生徒達に言う。〉

不定詞の論理的主語の問題に戻る。述部第2項が原形不定詞の場合、その論理的主語は常に述部第1項（＝文の統語的目的語）の名詞句である。

- (42) Han bad mig vente.
〈彼は私に待つことを求めた。〉
- (43) Jeg bad ham sige (mig) sandheden.
〈私は彼が（私に対して）真実を言うことを求めた。〉
- (44) Han bad mig undskylde sin dristighed. (M: 717)
〈彼は自分の非礼を私が許すことを求めた。〉
- (45) Jeg beder dig hilse din familie.
〈お家の皆様によろしく（お伝え下さい）。〉

bede が原形不定詞を支配するとき、§3.1 の *lade* の場合と類似して、述部第1項の統語的目的語を省略できる場合がある。たとえば (44) の *mig*, (45) の *dig* は省略できる。さらには、不定詞の目的語が統語的目的語の位置に移動することもあるとして、Mikkelsen (1911: 110) は次の (46) を示している。

- (46) Sigrid beder dig hilse. (= S. beder mig hilse dig.) (M: 110)
〈S はあなたによろしくとのことです。〉

bede の述部第2項が *om at* 不定詞の場合、不定詞の論理的主語は主として述部第1項の統語的目的語であるが、文の統語的主語もなりうる。例を見てみる。

- (47) Vi bad hende om at synge for os. (D: 217)
〈私達は彼女が歌ってくれるようにと彼女にお願いした。〉
- (48) Jeg bad ham om snart at skrive.
〈私は彼が〔手紙を〕すぐに書いてくれるようにと彼にお願いした。〉
- (49) Hun bad ham om at gå. (M: 407)
〈彼女は彼が行ってくれるようにと彼にお願いした。〉

これに対して、

- (50) Hun bad ham om at måtte gå. (M: 408)

は、Mikkelsen (1911: 408) によれば、

- (50a) Hun bad ham, om hun måtte gå. (M: 408) (コンマの位置は原文のまま)
〈彼女は行かせてほしいと彼にお願いした。〉

となる。つまり、不定詞の論理的主語は文の統語的主語である。筆者の協力者の一人の Paludan-Müller 氏も同じ解釈をするが、Jacobsen は文の統語的主語も統語的目的語も不定詞の論理的な主語になりうるとする。すなわち、(50a) のほかに、Jacobsen (私的メモ 1982) は (50b) もあるとする。

(50b) Hun bad ham om, at han måtte gå. (コンマの位置は原文のまま)

〈彼女は彼に行ってくれるようにと懇願した。〉

måtte は (50a) では「許可」〈…してもよい〉, (50b) では「必要」〈…しなければならない〉の意となる。

få と tage が不定詞となる場合を見てみよう。§ 3.3 の tilbyde の場合はこの動詞の主語が「提供者」であるが、bede om の主語は「要求者、懇願者」であるので、få と tage の論理的な主語は、tilbyde と bede om では逆の関係になる (§ 3.3 の (H3), (H4) 参照)。当然ながら、不定詞の論理的な主語には統語的目的語も統語的主語もなりうるはずであるので、以下の場合ではどちらの方がより自然かということである。

(51) Jeg bad ham om at få penge med.

の場合、統語的主語の jeg が論理的な主語になる方が自然である。(いずれにせよ、両解釈がありうるので、(51) の文意は、(a) 〈私は私にお金を受け取って行かせてほしいと彼にお願いした。〉, (b) 〈私は彼がお金を受け取って行くようにとお願いした。〉となる。)

tage の場合は、

(52) Jeg bad ham om at tage penge med.

〈私は彼がお金を受け取って行くようにと彼にお願いした。〉

となる。(Christensen は統語的主語も不定詞の論理的な主語になることが不可能ではないとする。これは可能な解釈であろう。その場合の文意は 〈私は私にお金を持って行かせてほしいと彼にお願いした。〉となる。)

(53) は、give が〈与える〉の意味なので、統語的目的語のみが不定詞の論理的な主語となる。

(53) Jeg bad ham om at give besked i en fart.

〈私は彼が大急ぎで知らせをくれるようにと彼にお願いした。〉

なお、原形不定詞が第 2 項である場合には、上述のように、常に第 1 項が不定詞の論理的な主語となる。

(54) Jeg bad ham få penge med.

〈私は彼がお金を受け取って行くことを彼に求めた。〉

(55) Jeg bad ham tage penge med.

〈私は彼がお金を持って行くことを彼に求めた。〉

標記の (H7) の意味は以下の通りである。

(H7) Han bad mig om at blive klippet.

a. (=Han bad mig om at jeg skulle klippe hans hår.)

〈彼は彼の髪を刈って下さいと私に言った。〉

b. (=Han bad mig om at jeg skulle klippes [af en eller anden].)

〈彼は私の髪を〔誰かに〕刈ってもらって下さいと私に言った。〉

c. (=Han bad mig om at han ville klippes [af en eller anden].)

〈彼は〔誰かに〕彼の髪を刈てもらうようにして下さいと私に言った。〉

(H7) の om at を削除した

(56) Han bad mig blive klippet.

はもちろん、〈彼は私が散髪してもらうことを私に求めた。〉の意味にしかない。

コンテクスト次第で、(H7a)、(H7b) はどちらも同じように可能である。(H7a) はたとえば han が顧客で、mig が理容師といった場合、(H7b) はたとえば han が軍隊の上官で、mig は未だ髪を長くしたままの新兵といった場合が考えられよう。この両者にくらべると、(H7c) はあまり普通とは言えないが、不可能ではない。(H7c) は、たとえば han が自分の長い髪型がいやになっている少年で、mig はその髪型を今まで変えてはいけないうってきた父親とか母親といった場合が考えられよう。

標記の文 (H8) は次のような文意となる。

(H8) Han bad mig om at få lov til at blive klippet.

(=Han bad mig om at jeg skulle få lov til at han/jeg blev klippet.)

a. 〈彼は〔誰かが/私が〕彼の髪を刈る許可を〔誰かから〕もらって下さいと私に言った。〉

b. 〈彼は私が〔誰かに/彼に〕髪を刈ってもらう許可を〔誰かから〕もらって下さいと私に言った。〉

許可を得てくるのは「私」であるが、散髪してもらうのは「彼」か「私」である。また、散髪をする「誰か」とはたとえば理容師、許可を与える「誰か」はたとえば親である。なお、blive klippet は述語動詞 bad に支配されるのではなく、få lov til に支配される不定詞句である。

なお、述部第2項が名詞句の場合には“bede én om+名詞句”の形となり、omをもつ構造のみが可能となるので、±om at 不定詞の場合の用法・意味の相違は、“om+名詞”の場合には文脈によることになろう(下記の例文(74)–(76)参照)。

4. 統語的主語が述部第2項の不定詞の論理的主語となりうる動詞

§3の love, tilbyde, bede om に支配される述部第2項の不定詞の論理的主語には、述部第1項の統語的(間接)目的語のほか、統語的主語もなりうる。しかし、この

ような「コンテキストに支配される」2項他動詞はそれほど多くないものと思われる。
上記の動詞のほか、foreslå〈提案する、申し出る〉もこの型の動詞である。

Bruun (1995: 119) に次のような例がある。

(57) Jeg foreslog (ham) at (han skulle) købe huset.

(58) Jeg foreslog (ham) at (jeg skulle) købe huset.

これは次のように読むことができる。

(59) Jeg foreslog ham at købe huset.

a. = Jeg foreslog ham at han skulle købe huset.

〈私は、彼がその家を買ったらどうだろうと、彼に提案した。〉

b. = Jeg foreslog ham at jeg skulle købe huset.

〈私は、私がその家を買おうと、彼に提案した。〉

§ 3.4 で触れたが、love, tilbyde, foreslå の主語は「提供者」であるのに対し、bede om の主語は、どちらかと言えば「受容者」である。このことは、第2項が不定詞 få, tage の場合にも見られるし、第2項が名詞句である場合にも明瞭に見られる。(a) 実線の句 = 不定詞の論理的な主語としてもっとも自然；(b) 破線の句 = 不定詞の論理的な主語になりうる句。)

(60) Jeg lovede ham at få penge med.

(a) 〈私は私がお金を受け取って行くことを彼に約束した。〉

(b) 〈私は彼がお金を受け取って行ってよいと彼に約束した。〉

(61) Jeg lovede ham at tage penge med.

〈私は私がお金を持って行くことを彼に約束した。〉

(62) Jeg tilbød ham at få penge med.

(a) 〈私は彼がお金を受け取って行くようにと彼に申し出た。〉

(b) 〈私は私がお金を受け取って行くと彼に申し出た。〉

(63) Jeg tilbød ham at tage penge med.

〈私は私がお金を持って行くと彼に申し出た。〉

(64) Jeg bad ham om at få penge med.

(a) 〈私は私がお金を受け取って行かせてもらえるように彼にお願いした。〉

(b) 〈私は彼がお金を受け取って行ってくれるように彼にお願いした。〉

(65) Jeg bad ham om at tage penge med.

〈私は彼がお金を持って行ってくれるようにと彼にお願いした。〉

(66) Jeg foreslog ham at få penge med.

〈私は彼がお金を受け取って行くことを彼に提案した。〉

(67) Jeg foreslog ham at tage penge med.

[不定詞の論理的な主語として、統語的目的語と同等に統語的主語も自然。]

(a) 〈私は彼がお金を持って行くことを彼に提案した。〉

(a) 〈私は私がお金を持って行くと彼に提案した。〉

述部第2項が不定詞句ではなく名詞句（または前置詞句）の場合には第1項と第2項は「埋め込み文」を形成するが，love, tilbyde, foreslå の場合には第1項の名詞句は「受容者」となり，bede om の場合には「授与者」となる。

(68) Han lovede mig en ny frakke.

〈彼は私に新しいコートを〔(買って)くれると〕約束した。〉

[Jeg får/fik en ny frakke.]

(69) Direktøren lovede funktionærerne bedre arbejdsforhold. (EH: 30)

〈社長は社員に，より良い労働条件を約束した。〉

[Funktionærerne får/fik bedre arbejdsforhold.]

(70) Han tilbød mig hjælp.

〈彼は私に助けを提供してくれた。〉

[Jeg får/fik hjælp.]

(71) Firmaet tilbød mig en stilling.

〈その会社は私に職を提供してくれた。〉

[Jeg får/fik en stilling.]

(72) Han foreslog mig et kompromis.

〈彼は私に妥協(案)を申し入れた。〉

[Jeg får/fik et kompromis.]

(73) Han foreslog mig til dirigent.

〈彼は私が指揮者になるようにと提案した。〉

[Jeg får/fik en stilling som dirigent.]

Jeg bliver/blev dirigent.]

(74) Vi bad hende om en sang. (D: 217)

〈私達は彼女に歌を1曲お願いした。〉

[Hun giver/gav en sang; Hun synger/sang en sang.]

(75) Han bad mig om hjælp.

〈彼は私に助けを求めた。〉

[Jeg giver/gav hjælp.]

(76) Han bad mig om tilladelse.

〈彼は私に許可を求めた。〉

[Jeg giver/gav tilladelse.]

以上の4個の動詞のほかにも，特殊な2項他動詞は存在しよう。たとえば hjælpe 〈助ける，手伝う〉の場合はどのようなになるだろうか。Mikkelsen (1911: 407) は

統語的目的語が不定詞の論理的主語になる場合の例として (77) を示している。

(77) Jeg skal nok hjælpe Knud med at bringe den sag i orden.

〈私はKがその問題を解決・処理するのを助けましょう。〉

この場合、「助ける、手伝う」ということが「彼と一緒にになって解決・処理することではないのかもしれない。しかし、統語的目的語の人と一緒に統語的主語の人も不定詞で示される行為をともに行なうといった場合もある。たとえば

(78) Han hjalp mig med at bære skabet.

〈彼は私が戸棚を運ぶの手伝ってくれた。〉

(78) の場合、「彼」も一緒にになって運んでくれたと解釈するのが自然であろう。述部第2項が不定詞以外の要素でも同様であろう。たとえば

(79) Han hjalp mig med mit hjemmearbejde.

〈彼は私の宿題を手伝ってくれた。〉

(80) Hun hjælper barnet i seng.

〈彼女はその子が床につくのを手伝う。〉

(81) Hun hjælper barnet af/i klæderne.

〈彼女はその子が着物を脱ぐ/着るのを手伝う。〉

5. まとめ

これまで見てきたように、2項他動詞に支配される述部2項同士の関係は、一般に「論理的主部+その述部」となる「埋め込み文」を形成する。それゆえ、§2で示した文は { } で示す基本構造をもつと言えよう。

(82) = (1) Jeg så flyvemaskinen falde ned.

←{jeg se [flyvemaskinen falde ned]}

(83) = (2) Han bød dem komme nærmere.

←{han byde [de komme nærmere]}

(84) = (3) Han anbefalede mig at tale med chefen selv.

←{han anbefale [jeg tale med chefen selv]}

(85) = (5) Jeg fik ham til at gøre det.

←{jeg få (til at) [han gøre det]}

(86) = (6) Jeg har advaret ham mod at misbruge medicin.

←{jeg advare mod [han misbruge medicin]}

これに対して、§3の love, tilbyde, bede om および §4.1の foreslå の場合には、「埋め込み文」となるほかに、文の統語的主語が不定詞の論理的主語になりうる。この後者の場合は、ある種の1項他動詞とみなすことができるのかもしれない。とくに love は1項他動詞の性格が強いと思われる。

- (87) = (28) Jeg har lovet ham at blive hans efterfølger.
 ←{jeg love [jeg blive hans efterfølger] [til ham]]
- (88) = (27) Jeg har lovet ham at blive min efterfølger.
 ←{jeg love [han blive min efterfølger]]}
- (89) = (29) Jeg tilbød ham at rejse i hans sted.
 ←{jeg tilbyde [jeg rejse i hans sted] [til ham]]}
- (90) = (30) Jeg tilbød ham at rejse i mit sted.
 ←{jeg tilbyde [han rejse i mit sted]]}
- (91) = (50) Hun bad ham om at måtte gå.
 ←{hun bad om [hun måtte gå] [til ham]]}
 ←{hun bad om [han måtte gå]]}
- (92) = (59) Jeg foreslog ham at købe huset.
 ←{jeg foreslå [han købe huset]]}
 ←{jeg foreslå [jeg købe huset] [til ham]]}

ところで、2項他動詞の述部が「埋め込み文」を形成する場合、この述部を含む構文をいわゆる5文型にあてはめるのは厄介なことである。とくに、述部が「名詞句+原形不定詞」および「名詞句+at不定詞」の場合がそうである。文法書によれば、前者は「直接目的語(対格目的語)+原形不定詞」(cf. Mikkelsen (1911: 110); Diderichsen (1962: 217); Aa. Hansen (1967: 83))で、後者は「間接目的語(与格目的語)+直接目的語」(cf. Mikkelsen (1911: 405); Diderichsen (1962: 188); Aa. Hansen (1967: 81f.); Rehling (1965: 131f.))であると言われる。それでは、前者の原形不定詞はどのような文構成素なのだろうか。これについては文法書では説明されていないが、この2項を“不定詞付き対格”(akkusativ med infinitiv)と呼ぶふところからすると、2項全体を直接目的語とみなすのかもしれない。いずれにせよ、述部の2項が埋め込み文を形成する場合に、第1項の名詞句が直接目的語であろうと間接目的語であろうと、そして第2項の不定詞がatつきであろうとなかろうと、これら2項の関係が「論理的主部とその述部」になっているということが重要なことなのである。不定詞の論理的主語が統語的主語の場合の分析はむずかしい。結局は、動詞の意味的特徴によるのであろうが、類似の意味の2項動詞とどのように相違するのかを説明するのはむずかしい(「付記」の例文参照)。(88)–(92)で試みたような基本構造をもつと思われるが、この点は本稿では未解決の問題として残す。

(1996.7.27)

付言己：「埋め込み文」文例

名詞句 + 原形不定詞句

Jeg så ham gå ud ad vinduet.
〈私は彼が窓から出て行くのを見た。〉
Jeg hørte ham åbne døren.
〈私は彼がドアを開ける音を聞いた。〉
Jeg følte jorden ryste.
〈私は大地が揺れるのを感じた。〉
Jeg mærkede stormen komme nærmere.
〈私は嵐が近付いてくるのがわかった。〉
Jeg lod ham forstå det.
〈私はそれを彼に分からせた。〉
Lad mig få en æske magnyl. (LD: 47)
〈[鎮痛剤の] マウニュールを1箱下さい。〉
Vi lod folk snakke.
〈私達は人に勝手に言わせておいた。〉
Børnene lod ham ikke være i fred.
〈子供達は彼が一人静かにいることを許さなかった。〉
Han bød dem svare med det samme.
〈彼は彼等に直ちに返答することを求めた。〉

名詞句 + at 不定詞句

Jeg befaler dig at tie stille! (N: 163)
〈私はあなたに静かにすることを命じる; 静かにしなさい。〉
Politiet forbød os at blive i parken. (EH: 28)
〈警察は私達が公園に居つづけることを禁じた。〉
Må jeg anmode Dem at gøre mig en tjeneste? (N: 126)
〈ちょっとお願いしてよろしいでしょうか。〉
Man anmodede ham at gøre det. (AaH: 82)
〈人は彼がそうするように切に求めた。〉
Jeg anbefaler dig at vise større forsigtighed. (B: 23)
〈私はあなたがより一層の慎重さを示すよう忠告する。〉
Det gode vejr tillod folk at sidde udenfor. (N: 1105)
〈好天のおかげで、人々は戸外で過ごすことができた。〉

Jeg betroede ham at indkassere pengene.
〈私は彼に集金を任せた.〉
Han tilrådede mig at søge permission. (M: 405)
〈彼は私が許可を申請するようにと勧めた.〉
Jeg fraråder dig at indlade dig med ham.
〈私はあなたが彼と係わり合いにならないように忠告する.〉
Vi anser ham at være for (en) begavet (mand).
〈私達は、彼が有能(な人)であるとみなす.〉
Min fader lærte mig at læse. (N: 692)
〈父は私に読むことを文字を教えてくれた.〉

名詞句 + 前置詞 + at 不定詞句

Jeg fik ham til at le.
〈私は彼を笑わせた.〉
Han fik bilen til at køre.
〈彼は(何とか)車をスタートさせた.〉
Obersten beordrede soldaterne til at afbryde broen.
〈大佐は兵士に橋を破壊するように命令した.〉
Han pressede mig til at svare.
〈彼は私に回答することを強要した.〉
Jeg tvang ham til at tie stille.
〈私は彼を強制的に黙らせた.〉
De truede ham til at aflevere pengene. (N: 1130)
〈彼等は彼に金を出せと脅した.〉
Hun betroede ham til at passe børnene.
〈彼女は子供の世話を彼に任せた.〉
Jeg advarer dig mod at løbe sådan en risiko.
〈私はあなたがそんな危険を冒さないようにと警告する.〉
Jeg råder dig til at vente. (B: 369)
〈私はあなたに待つことを勧める.〉
Jeg råder dig fra at indlade dig med ham.
〈私はあなたが彼と係わり合いにならないように忠告する.〉
Vi indbød ham til at holde foredrag.
〈私達は彼に講演を行なうようにと要請した.〉
Han opfordrede mig til at søge stillingen. (N: 798)
〈彼は私がそのポストを求めるようにとしきりに勧めた.〉

Man tilskyndte ham til at gå ind i bestyrelse. (AaH: 82)

〈彼に執行部に加わるよう促した。〉

Jeg overtalte ham til (ikke) at gøre det.

〈私は彼がそれをする(しない)ようと説得した。〉

Han afviste mig fra at deltage i mødet.

〈彼は私が集会に参加することを拒否した。〉

Han forskånede mig for at høre resten. (EH: 29)

〈彼は私に残りの部分を聞くことを免じてくれた。〉

Vi forhindrede ilden i at brede sig.

〈私達は火の手が広がるのを防いだ。〉

名詞句 + 名詞句

Man befalede ham tavshed. (AaH: 82)

〈彼に沈黙を命じた; 彼を沈黙させた。〉

Man tillader ham frisprog. (AaH: 82)

〈彼に自由に話させる。〉

Du må gøre ham en undskyldning.

〈あなたは彼に謝らなくてはならない。〉

De fradømte ham kørekortet.

〈[当局は] 彼から運転免許証を剥奪した。〉

Retten idømte ham en bøde.

〈法廷は彼に罰金刑を言い渡した。〉

Han forbød mig adgang.

〈彼は私の入場・使用を禁止した。〉

Jeg anbefaler dig større forsigtighed. (B: 23)

〈私はあなたがより一層慎重にするように忠告する。〉

Jeg tilråder dig større forsigtighed. (B: 467)

〈私はあなたがより一層慎重にするよう忠告する。〉

Han gav mig nogle råd.

〈彼は私にアドバイスをいくつかくれた。〉

Han sendte mig en pakke.

〈彼は私に小包を送ってくれた。〉

Han bragte os en nyhed.

〈彼は私達にニュースをもってきた・きてくれた。〉

Mor købte mig et par sko.

〈母は私に靴を1足買ってくれた。〉

Jeg sikrede mig en plads. (R: 132)

〈私は席を確保した。〉

Han rakte mig saltet.

〈彼は私に塩をとってくれた。〉

Han bød mig en stol.

〈彼は私に席を提供してくれた。〉

Han bød mig armen.

〈彼は私に腕を貸してくれた。〉

Jeg har betroet banken min formue. (N: 179)

〈私は銀行に私の財産を預けた。〉

Vi betroede ham ansvar.

〈私達は彼に責任を委ねた。〉

Jeg overlader dig resten. (N: 814)

〈あとはあなたに任せます。〉

Jeg ønsker dig en god rejse.

〈楽しいご旅行をなさいますように。〉

Hun lærte ham engelsk.

〈彼女は彼に英語を教えた。〉

Vil du lige forklare mig det her?

〈これをちょっと私に説明してくれますか。〉

Han viste os vejen. (R: 132)

〈彼は私達に道を教えてくれた。〉

Folk viste ham respekt.

〈人々は彼に敬意を表した。〉

Han gjorde mig en tjeneste.

〈彼は私を手助けしてくれた。〉

Jeg fortalte ham en historie.

〈私は彼に話をひとつした。〉

名詞句 + 前置詞句

Han pressede mig for (et) svar.

〈彼は私に回答を強要した。〉

Jeg tvang ham til tavshed.

〈私は彼に沈黙を強制した；私は彼を黙らせた。〉

De gjorde ham til grin.

〈彼等は彼を笑い物にした。〉

Sagen tilskyndte folk til oprør.

〈その事件は人々を暴動に駆り立てた.〉

Jeg bad ham om forladelse.

〈私は彼に許しを乞うた.〉

Jeg har advaret ham imod hasardspil.

〈私は彼に賭け事をしないようにと警告した.〉

Vi indbød dem til middag.

〈私達は彼等を夕食に招いた.〉

Vi inviterede dem til middag.

〈私達は彼等を夕食に招待した.〉

Jeg skal forskåne Dem for detaljer. (N: 130)

〈詳細は省略させていただきます.〉

Jeg betragter affæren som afsluttet. (N: 179)

〈私はその件は終了したものとみなす.〉

Vi anser ham for (en) begavet (mand).

〈私達は彼が有能(な人)であるとみなす.〉

Han holdt kniven i hånden.

〈彼はナイフを手握っていた.〉

Han viste mig om i byen.

〈彼は私を町のあちこち案内してくれた.〉

Jeg anbefaler ham på det varmeste til stillingen. (N: 121)

〈私は彼をそのポストに心から推薦申し上げます.〉

Jeg ønsker ham som medhjælper.

〈私は彼を助手として欲しい.〉

Jeg bragte ham på/til stationen.

〈私は彼を駅へ連れて行った.〉

Jeg sendte ham i børnehave.

〈私は彼を保育所へ送り出した.〉

Han kørte børnene i skole.

〈彼は子供達を学校へ車で送って行った.〉

Hun vaskede en plet af kjolen.

〈彼女はしみをドレスから洗い落とした.〉

名詞句 + 形容詞句/副詞句

Jeg finder hende smuk.

〈私は彼女が美しいと思う.〉

Gaven gjorde dem glade.

〈その贈り物は彼等を喜ばせた.〉

Hun vaskede flasken ren.

〈彼女はびんをきれいに洗った.〉

De holdt prisen lav.

〈彼等は価格を低くおさえておいた.〉

Jeg vil ikke have vasketøjet hængende i badeværelset.

〈私は洗濯物を風呂場にぶらさげてもらいたくない.〉

Han fik cyklen repareret.

〈彼は自転車を修理してもらった.〉

〈彼は(何とか)自転車を修理した.〉

Han fik pengene udbetalt.

〈彼はお金を支払ってもらった.〉

Hans død gjorde hende bedrøvet.

〈彼の死は彼女を悲しませた.〉

Jeg ønsker dette gjort/ugjort. (M: 51)

〈私はそれが行なわれること/行なわれないことを願う.〉

Vi lod ham alene.

〈私達は彼を一人にさせた・させておいてやった.〉

Hun holdt børnene borte.

〈彼女は子供達を遠ざけておいた.〉

Jeg kunne ikke få et ord frem. (N: 413)

〈私は一言も発することができなかった.〉

Jeg kaldte ham hjem.

〈私は彼を家へ呼び戻した.〉

Han fik sin vilje igennem.

〈彼は自分の意思を通した.〉

Hun fik sønnen en kop kamille te ned.

〈彼女は息子にカップ1杯の[せんじ薬の]カモミール茶を飲み込ませた.〉

Jeg rakte armene op.

〈私は両腕を上にはばした.〉

Hun bragte rygtet ud i byen. (N.211)

〈彼女はうわさを巷にばらまいた.〉

Logisk subjekt for infinitiv som indholdsled

Hideo Mase

Resumé

De to indholdsled (= led i indholdsfeltet) som styres af et „bitransitivt verbum“ består af et nominalled og et nominal-, adjektival- eller adverbialled. De danner i de fleste tilfælde en „indbygget sætning“ (Erik Hansen 1968) eller en „skjult sætning“ (Rehling 1965), dvs. forholdet „det logiske subjekt“ og „dets logiske prædikat“. Det gælder naturligvis også, når det andet led er infinitiv. Men der findes nogle verber der også tillader det syntaktiske subjekt at blive logisk subjekt for infinitiv, bl. a. *love*, *tilbyde*, *bede om*, *foreslå*. Betydningen af de to indholdsled afhænger af semantiske træk ved infinitiv eller infinitivled. Her i artiklen forklares for japanske læsere nogle indviklede sætninger som vises i Erik Hansen (1968: 51).

参考文献

(発行地は København)

- Diderichsen, Paul. 1962. *Elementær dansk Grammatik*. 3. Udg. Gyldendal.
Hansen, Aage. 1967. *Moderne dansk. III*. Grafisk Forlag.
Hansen, Erik. 1968. *Sprogets mekanisme*. Jul. Gjellerups Forlag.
Mikkelsen, Kr. 1911 (Reprint 1975). *Dansk ordføjningslære*. Hans Reitzels Forlag.
Rehling, Erik. 1965. *Det danske sprog*. Tredie, helt omarbejdede udgave. J. H. Schultz Forlag.

辞書・資料

- Axelsen, Jens. 1995. *Dansk-Engelsk Ordbog*. 10. udg. Gyldendal.
Becker-Christensen, Christian & Peter Widell (red.). 1995. *Politikens NU-DANSK ORDBOG & SPROGBRUGSLEKSIKON*. 15. udg. Politikens Forlag.
Bruun, Erik. 1995. *Dansk Sprogbrug. En stil- og konstruktionsordbog*. 2. udg. Gyldendal.
Hildeman, Nils-Gustav & Ann-Mari Hedbäck. 1993 (1970). *Lær dansk. Dansk for udlændinge. Tekstbog*. Dansk bearbejdelse: Bjarne Bangsgaard & Peter Budtz-Jørgensen. 1. udgave, 15. oplag. Gjellerup & Gad.
Vinterberg, Herman & C. A. Bodelsen (red.). 1990 (1966). *Dansk-engelsk Ordbog*. 3. udg. ved Viggo Hjørnager Pedersen. Gyldendal.